



アイディアの結晶化に向けて - Youkobo Returnee Residence Program 第1弾
デイビッド・フランクリンの2ヶ月にわたる創作活動

目次

1. 事業の紹介
2. Youkobo Returnee Residence Program 第1弾
 - 作家紹介 – デイビッド・フランクリン
 - 今回の滞在制作活動の要約
 - アーティストトークおよびディスカッションイベント
3. 作家略歴
4. 事業の評価

【事業の紹介】

アーティストレジデンスは、アーティストの創造的な実践において重要な役割を果たし、支援環境のもと、実験的試みを行う場を提供することで、異なる文化や環境と繋げ、有意義な方法で探求する一助となっている。これは、芸術家の創作活動において、しばしば予期しない、後の段階で新たな創造の形として結晶化するような新しい発見へと導いている。

遊工房アートスペースは、芸術家支援活動30周年を記念し、過去の滞在作家を対象に、更なる創造的な研究の発展を目的としたYoukobo Returnee Residency Programを2017年12月1日から開始した。参加アーティストは、遊工房で作品を展示する他、前回と今回の経験をもとに、参加者側・運営側双方にとってのレジデンス事業の意義などについて議論する公開トークイベントも行う。

【Youkobo Returnee Residence Program 第1弾】

期間：2017年12月1日～2018年1月31日

作家紹介：デイビッド・フランクリン：

Youkobo Returnee Residence Program (以下YRRPと略)第1弾として、バルセロナを拠点に活動するビジュアルアーティストのデイビッド・フランクリンが、2ヶ月の滞在制作を行った。デイビッドは、2009年に遊工房で8ヶ月間のアーティスト・イン・レジデンスプログラム（AIR）に参加し、都市の廃墟、日本や西洋における風景の視覚化、戦後の日本文化をテーマとした作品の骨格を制作した。その後、バルセロナで成功を収める傍ら、他のAIRにも参加しており、今回のYRRP参加は、彼にとって、前回2009年に始めた活動が続ける契機となった。また、遊工房にとっても、作家との対話を通して、本事業が芸術家の活動に与える影響について振り返る貴重な機会となった。

今回の研究活動の概要：

2回目となる今回の遊工房での滞在中、デイビッドは、日本の状況を背景とした、景観と社会の関連性を探る新しい長期プロジェクトを始動させた。予想外の要素がもたらされることを期待し、あえてプロジェクトの結果に制約を設けず、2ヶ月間の滞在中に実地調査の対象を二つに絞った。一つは、東京の都市空間を記録すること、そして二つ目は、2018年3月の新公演に向けて準備中である、舞踏家であり大駱駝艦の一員である松田篤史氏とのインタビューである。

今回の研究活動の中心になっているのは、景観(=landscape)とは、「見る者の意識の中で認識され構築されている領域であり [...]、私たちの自己概念は、私たちの環境の認識と本質的に繋がっている。」¹という考えである。故に、デイビッドが今回松田氏の行動を調査対象とした理由は、東京という都市環境が松田氏の舞踏とその創造的活動に与える潜在的な影響を観察するためである。

デイビッドは現在、本年度後半に再来日し、その調査を掘り下げるだけでなく、火山や地震などの地質学的活動によって形成された日本の壮大な風景を自らの目で確認することを計画をしている。これらの調査結果を組み合わせ、風景が人間の営みにどのように影響を与えてきたか、また一方で、人間がどう環境へ反応してきたかという概要的な見方を形作り、新しい映像作品やドローイング、絵画作品を通じて発表する予定である。

遊工房での展示会 - Curse

期間：2018年1月24日～1月28日

遊工房アートスペース Studio 3

展示では、2009年遊工房での滞在時に撮影した映像を用いて制作された「Views of Distant Stations」と「Company」という二つの映像作品を展示。個人とそれを取り巻く環境との関係を探るというテーマで、何気ない日常の場所を舞台に撮影された。「Views of Distant Stations」は、月や富士山という主題を取り入れた浮世絵から着想を得ている。「Company」は、サミュエル・ベケットの同名短編小説を参考に、物理的な環境との精神的な結びつきを、人間を取り巻く密な環境と宇宙を比較しながら、実存的瞑想として表現している。また、人間の身体と形而下的景観の交わりを表した線描も展示された。



「Company」より 2014年/デジタル・ビデオ作品/5分14秒



¹本YRRP事業に向けたデイビッド・フランクリンの企画書(2017年12月)より抜粋

アーティストトーク&ディスカッション

開催日：2018年1月27日

話し手：デイビッド・フランクリン、ジェイミー・ハンフリーズ（遊工房AIRコーディネーター）

参加人数 20名（2009年AIR参加時からのデイビッドの友人も含め、アーティスト、舞踊家、写真家、その他美術関係者）

以下、トークおよびディスカッションの要約である。

第1部 デイビッド・フランクリンによるプレゼンテーション

第1部では、映像を流す傍らで、自身の創作活動における中心的な発想について、デイビッドがプレゼンテーションを行った。その主題は、絵画、視覚言語の進化、芸術の発展における技術と科学の役割、1600年代のオランダの風景画、歴史を通して見る人類の空間に対する概念の拡張、宇宙の探索と他の惑星への移住の可能性、中国の絵画の風景に対する哲学的概念、サイエンス・フィクション(SF)、周りの環境に対する私たちの解釈などに及んだ。

作品全般の紹介に続き、過去2ヶ月の調査活動について言及した。活動の焦点は、松田篤史氏との数回にわたるインタビューである。同氏は、舞踏家並びに大駱駝艦の一員であり、2018年3月に予定されている新公演に向けて準備中である。デイビッドは、同氏の話から発展し、戦後日本の美術におけるニューウェーブについて語ったほか、暗黒舞踏の創始者・土方巽の舞踏への関心、細江英公の画期的な写真集である「鎌鼬」への土方の関与についても触れた。

第2部 アーティストの創作活動におけるAIRの役割についての意見交換

遊工房でのAIRに再度参加した動機

ディスカッションは、遊工房でのAIRにデイビッドが再度参加した動機から始まった。前回のAIRでは、アイルランドを出て、可能な限り大きな環境に自らを置いてみたいという明確な目的があった。滞在時、幸運にも遊工房近くの芸術家グループと知り合ったことで、制作にあたっての強固な文脈が形作られ、作品に思いがけない深みが生まれた。

今回のAIRでは、自身の長期プロジェクトの始まりとして、それを完成することを目的にするのではなく、最終的な着地点を意図的にオープンにしたことを語った。デイビッドは、遊工房の利点として、支援体制がしっかりしている一方で、自由に活動できる絶妙な環境バランスを挙げ、調査と制作に専念できる整った支援環境に感謝した。

デイビッドは、松田氏とのインタビューから、創作活動に関して二人で意見交換した内容について話した。松田氏は、舞踏は自由なものであり、新しい公演は、内容を前もって決めておくのではなく、自由な振り付けに始まり、舞踏を「発見する」ということを心掛けていると語ったという。また、松田氏は、作家の創作活動においては、ある程度の規律や制約が必要との見方を示した。デイビッドはこの考えに強く賛同し、今回のプロジェクトには、成果の秩序の欠如や不確定要素が作品にもたらす効果が重要な一方で、遊工房の支援体制の重要性も強調した。

初回AIR後の活動並びにAIRの多様性について

遊工房での第一回目の滞在がその後のアーティスト活動に与えた影響について、デイビッドの場合、初回での経験は、作品だけではなく制作面におけるアプローチの仕方においても、今日までの彼の活動の起点になったという。

トークはその後、近年AIRが大きく変化したこと、1週間や2週間といった短期間なものを含む、幅広い

AIR事業が増加したことに話が及んだ。現在、芸術家であれば、ある時点で何かしらの滞在事業に参加することが当たり前になっているが、職業としての「芸術家」の「成功」の意味の変化が、AIRの役割に何らかの弊害をもたらしている可能性を指摘した。デイビッドは、有意義な創作活動（どのような過程であっても）と交流を達成するためには、AIR運営者はAIR実施の動機を、参加アーティストは参加動機を明確にする必要があると述べた。

アイルランドと日本文化の共通点について

ジェイミーとデイビッドのトーク後、質疑応答に移り、参加者との活発な話し合いが展開された。遊工房での初回AIR参加申請時に、出身国であるアイルランドと日本は両方とも島国であるということを意識していたのかという質問があり、デイビッドは、それを意識して決めた訳ではないが、両国民の表現の仕方に共通点があることに来日してから気が付いたことを述べた。特に、相手の顔色を窺って曖昧なコミュニケーションを取るという点は環境に起因していると考えられ、大陸であれば同じ人に再会する可能性は低い、狭い島国ではその確率は高く、互いに無用な衝突を避けたいという島国ならではの処世術である可能性を指摘した。

デイビッドは、アイルランドの歴史的観点から、自然環境がアイルランド人のアイデンティティーに与えた影響について語った。例として、ローマ帝国崩壊後、アイルランドでは、キリスト教神学は修道僧によって守られたが、それは同国の地理的な位置と小さな島国で他国から離れていたということが要因の一部であったことを挙げ、取り巻く環境と人との確固とした繋がりがいかにして人間の精神を形作るのかを強調した。



作家略歴

スペイン・バルセロナを拠点にするデイビッド・フランクリンは、絵画、ドローイング、映像制作を中心とした活動を行っている。現在の主題は、風景の交差と、環境に対する概念形成上のイメージの利用で、具体的には、技術がビジュアルアートやイメージに及ぼす影響、宇宙生物学と人間の環境の拡張、アニメの技術と美意識、伝染病の歴史、日本の戦後芸術、中国絵画の哲学である。最近出版された「Empire of Rats」（ネズミの帝国）は、文章と写真を組み合わせて、日本とスペインにおける近代的な廃墟、それらと商業主義・国家主義・文化的記憶との関連性を探っており、ニューヨーク近代美術館（MOMA）とバルセロナ現代美術館（MACBA）のアーカイブとなっている。2017年および2018年に、バルセロナのカタルーニャ美術館でのリサーチ・レジデンス事業に参加。

AIRの評価

2017年12月に再来日したデイビッドは、1989年から始まった遊工房のAIR事業の297人目のアーティストである。遊工房は2019年に30周年を迎えるが、YRRPは、AIRの価値を考察する重要な機会でもある。一般的には、AIRの評価は難しいと考えられているが、その意味で、YRRPは、遊工房がここ数年行っている重要な調査テーマである、AIRの価値についての議論・数値化・可視化を試みる格好の機会である。

作家からの協力を直接得ながら、彼らにとっての初めてのAIR経験と、その後の作家活動の発展、2回目のAIR経験を、具体的に形として表すこと。経験を数値化・視覚化することは困難であるが、その考察に対して私たちは高い意欲がある。

遊工房AIR参加者300人目は、Erik Silleである。再来日となる彼は、スロバキアのレジデンス（KAIR）との交換事業で、2013年春に3ヶ月滞在した。記念すべき300人目であるエリックの2回目の遊工房AIRは、再招聘されたアーティスト（2回以上招聘されているアーティストも含む）の調査を開始する好機である。遊工房での初回AIR以降の創作活動や遊工房以外でのAIRについて作家に直接話を聞くことができるだろう。私たちが目指すのは、創作活動が続ける芸術家にとってのAIRの価値を見える化することにある。

遊工房アートスペース滞在報告書

2017年12月～2018年1月

2017年12月～2018年1月の2ヶ月間、遊工房アートスペースの芸術家受け入れ支援活動30周年の記念事業であるReturnee Residency Program（再招聘プログラム）の一環として、遊工房に再滞在する機会に恵まれた。前回2008年12月～2009年8月までの滞在は、その際の経験が、結果的に、芸術家としての今後の方向性を明確にする契機となった。前回の滞在から今回までの8年間、スペイン・バルセロナに拠点を移し、現地のアートシーンで順調に活動していたが、再び日本で新しいプロジェクトに取り組みたいという想いが心の片隅にあり、再来日の機会を探っていた。そのような理由で、遊工房から再招聘された今回は、新たな制作活動が始めるにあたり、まさに最適な機会であった。またそれと同時に、自身の多くの作品の起点となる場所に戻って、以前培った経験の層の上に新しい層を積み重ねていくということは、新しい制作活動とは、良い意味で対称的ともいえよう。

遊工房に提案した、現在進行中の新しいプロジェクトは、身体表現アーティストの協力を得て、彼らの公演の準備・練習の方法やその過程に眼差しを向けるものである。踊り手とのコラボレーションを通じて、環境が個人に与える影響について、大きな視野で見ることができるのではないかと以前から考えていたこと、そして戦後日本の芸能・芸術に見られる文化的・歴史的関連性も自身のこの関心を裏付けるものであった。また、活動を発展させ、日本の風景の特定の何ヶ所かに焦点を絞る予定である。これらが私が心に描いていた本プロジェクトの原形であり、やや曖昧な点があるものの、特に視覚的な意味においては確固たる発想があり、ドローイング並びに映像で制作すること、また、プロジェクトを構造していくにあたっての軸となる詳細なイメージを決めていた。しかし、本プロジェクトの早期の段階で活動の内容を決めることは、あえてしなかった。偶然の発展と、協力者の方からの意見がもたらされることを期待したからである。そういった意味では、結論に関して柔軟に取り組める環境が自身にとって重要であった。私が目指すこと、今回の滞在が本プロジェクトの起点となること、最終的な形は未完成になるかもしれないという可能性に対して、遊工房の方が理解を示してくれたことに感謝したい。

遊工房ならではの環境や、職員の方からの支援やツテを紹介してもらったお陰で、即座に始動することができ、予想していたより大きくプロジェクトを進行させることができた。舞踏家であり、大駱駝艦の一員である松田篤史氏に密着取材をさせて頂いたが、活動の目的を松田氏に素早く理解して頂いた上、すぐに協力して頂いた。松田氏の仕事ぶりや日常生活を追い、取材や会話を重ね、今回の作品を構成する基礎となる様々な哲学的・芸術的テーマを探ることができた。また、踊り手の川口隆夫氏と同氏の仕事仲間の方とも連絡を取らせて頂き、今回の活動に協力して頂いた。同時進行で、東京のあらゆる場所で、風景と音声の録画・録音を行った。結果的に、具体的な制作に取り掛かるだけではなく、プロジェクトの次の段階を計画できるほどに、十分な素材が揃った。

複雑で新しい創作活動に加え、その活動と関連した主題を扱った新旧の作品の展示会も、今回の滞在中に行われた。一部の作品は、前回2009年の滞在時に制作が始まったものである。また、同展示場所で、遊工房のジェイミー・ハンフリーズ氏司会による、トークイベントも開催された。アーティスト・イン・レジデンスについて、それが芸術家の生活と創作活動に占める位置、はたまた芸術一般に至るまで、様々な意見・質問が飛び交った。ほぼ3時間にわたる交流会では、様々な興味深い発見があり、自らの作品と新しい発想をこのような形で共有できて光栄であった。今回の滞在中に、他の芸術家、滞在先、芸術・文

化関係者と新たに知り合いになることができ、また近い将来、日本で本プロジェクトの制作活動が続ける見込みができた。

2ヶ月の留学中には、デンマーク出身のアナ・サムソエ（Anna Samsøe）氏とアンドレアス・ストゥビューエ・ジョハンセン（Andreas Stoubye Johansen）氏、フィンランド出身のアリ・サールト（Ari Saarto）氏という他の芸術家も遊工房に滞在していた。滞在開始が同時ですぐに仲良くなり、お陰で今回の滞在生活が更に充実したものになった。最後の数週間は、それぞれ展示会や交流会などの様々な準備が重なり慌ただしかったが、その間も彼らとの友情と意見交換が、特に強力な励みとなった。

遊工房での前回の滞在はとても模索的であり、試行錯誤や実験を繰り返し、吸収できるものをできるだけ吸収した数ヶ月であった。それと比較すると、今回は、特定の題材の作品に的を絞ったものであったが、それでもやはり、前回の経験が基になっている。新しい制作活動の重圧は厳しいものであったが、遊工房の職員の皆さんにご尽力・ご支援頂いたお陰で、短期間にも関わらず、非常に多くのものを得ることができ、予想していたよりも本プロジェクトを発展させることができた。今回の滞在は、日本と再度繋がり、前回の経験の上に新しい経験を積み重ね、制作においても新たな段階に一步踏み出すことができた貴重な機会であったと実感している。

2018年2月15日

デイビッド・フランクリン

E-mail: contact@davidfranklinonline.com

Website: davidfranklinonline.com

Facebook / Instagram: [davidfranklinonline](https://www.facebook.com/davidfranklinonline)